

91-23 ~~18-17~~ 20 1

おわ

あ	人	存	墓	通	と	寺	市	境
つ	の	の	地	一	院	街	街	墓
た	ハ	地	と	路	と	の	の	の
り	ル	、	一	直	余	中	中	地
た	ビ	ま	た	線	名	心	心	地
と	レ	植	。ス	、	一	と	と	
い	子	植	。ス	一	字	も	も	
お	於	墓	。ス	端	の	ぶ	ぶ	
。何	け	の	。ス	、	市	き	き	
とい	小	地	。ス	七	堂	と	と	
い	意	と	。ス	八	を	六	六	
お	回	一	。ス	町	た	ろ	ろ	
中	で	た	。ス	或	て	。中	。中	
か	あ	。ホ	。ス	は	、	央	央	
し	り	ホ	。ス	十	並	寺	寺	
い	、	ホ	。ス	町	木			
、	喜	ホ	。ス	も	路			
子	気	ホ	。ス	、	を			
た	込	ホ	。ス	並				
	込	ホ	。ス	木				
	込	ホ	。ス	路				
	込	ホ	。ス	を				

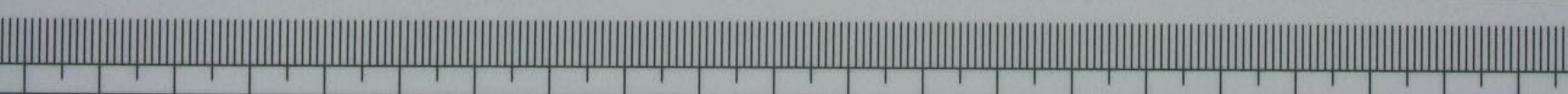


境墓の地

江戸秋島



MARUZEN 50240



75

80

85

90

忠壯に心慰ふるからか。私は遠か。中
 央の馬臺、心の熱づいて、その臺地の
 方へと足を向けた。
 臺地、入り前、さしつかえなく、
 北へ其処、心はありの年向けてとて境
 内へ入った。境内は可なり掃除が
 今、か、墳墓そのものか、潇洒さの感じ
 入った。と、とりもたず、陰翳を
 生さず、のり、接し、やり、思
 承知といふ、自ら象徴するかの
 墓碑

或

3	遠	の	足	ん	墳	部	立	の	は
生	く	か	牙	こ	墓	の	て	も	く
、	、	も	姉	あ	の	下	ん	は	く
故	休	知	妹	る	の	と	や	あ	く
人	息	と	る	如	眼	心	う	り	人
を	の	し	人	人	つ	処	の	の	の
よ	日	あ	い	の	て	が	も	さ	墓
ひ	あ	し	り	遺	今	故	あ	る	所
、	と	る	や	族	の	人	。	。	、
一	と	。	若	は	の	の	か	日	足
ら	と	か	は	故	字	恋	い	奉	の
そ	と	し	人	人	真	人	つ	懐	。
の	と	た	の	の	加	の	ト	。	大
在	と	同	恋	或	挿	其	も	中	中
世	と	後	人	は	入	知	ま	ね	形
の	と	の	の	。	マ	。	ま	る	
目	と	人	恋	或		。	。	を	
目	と	人	人	は		。	。		
す	と	人	人	。		。	。		

行かん

4

地かきよほむ情偉の保たよて守りたといふ、
 その写真と見こ行くと、よくは若く人のこ
 へのやいであら。何となく、古墳^墳跡くは少し
 の人、とぞつたやいろ古句か思ひ出よすこ、
 感傷的なる。た、^{手書}恐らくは大志を^抱いて、
 かの邊境の地、東に人煙たあさる。或は^父母^母
 の別と、志人と別よて果たりのあも、^知するら。
 静いいかたも、皆さうな静、目んにて、^静かこ
 考述と、暇一て守りのであら。左い市街は今

け	は	徳	力	そ	う	こ	い	く	こ
し	は	疑	加	の	そ	と	は	と	の
は	は	と	範	心	を	思	ふ	と	の
土	感	一	つ	報	而	小	合	と	の
曜	務	二	て	は	教	か	理	あ	の
白	的	、	序	、	心	、	的	の	あ
で	臨	、	の	永	和	と	的	か	の
、	つ	、	か	く	意	と	の	を	私
平	二	、	い	減	の	と	の	私	は
素	一	、	あ	す	か	古	の	は	知
ろ	二	、	い	こ	の	い	と	ら	ら
ば	三	、	い	と	を	回	と	の	の
、	四	、	日	出	禁	、	同	の	の
口	五	、	陰	果	し	思	の	私	の
こ	六	、	の	子	得	は	の	は	の
ヤ	七	、	懐	い	子	た	た	は	の
の	八	、	疑	尾	い	た	さ	は	の
甚	九	私	は	い	い	た	さ	は	の

の娘達が、美しき装束をして、午後四時、
おのあたりに、群を率いて来たので、あ、
中国兵の狼籍を恐れて、近頃はやめて、
とひそかに守り、のりといたし、をあり、を、
と又、何、子、一、二、甚しく感傷的、
と川や、か、つ、一、二、と、は、方、か、ら、葬、式、の、行、列、
か、り、。、子、は、新、共、の、見、惜、し、。、
大分異つて居て、棺の上には、宝、物、が、
あ、り、。、か、ら、い、は、。、
と、車、の、中、に、あ、ら、い、。、
と、車、の、中、に、あ、ら、い、。

去
し
と
考
人
の
さ
し
い
。
去
し
と
今
の
際
限
と
懐

の
と
懐
し
た
う
び
な
あ
ま
う
か
あ
い
糸
汁
子

の
ま
む
想
ひ
及
ほ
た
か
あ
ま
う
か
あ
い
糸
汁
子

向
う
と
、
脱
帽
一
機
北
し
と
、
脱
帽
一
機
北
と
考
う
た
。

このもとふろからか。
糸
機
北